

かけはし

梯川改修の歴史と手取川水害

大正14年ごろの梯川



国土地理院発行5万分の1地形図(小松市、大正14年)を使用

現在の梯川



国土地理院発行5万分の1地形図(小松市、平成9年)を使用

梯川は白山山系大日山連峰の鈴ヶ岳(二一七五^{トビ})に源を発する大杉谷川を源流とする。大杉谷と通称される山間部を北流して郷谷川を合流した後「御

茶用水頭首工」の上流部より「一級河川・梯川」となり、滓上川、仏大寺川を合流する。平野部に出てから西へ向きを変えて、鍋谷川、八丁川、前川

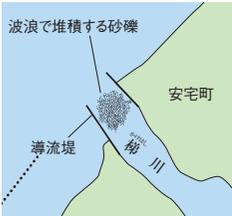
を合流して小松市安宅町で日本海に注ぐ。平野部では低湿地の沖積平野を蛇行して流れ、雨季には微高地に点在する集落や市街に水害をもたらしてきた。



明治29年(1896)の水害で屋根ごと流される村人



昭和43年(1968)8月29日、台風10号によって梯川がはらんし、水田に石などが流れ込んだ(千代町、『小松市制50周年記念誌』より) 鍋谷川や八丁川の堤防も決壊した。



梯川河口。西よりの季節風が導流堤を襲う

川の河口は冬の西よりの季節風によって海中の砂礫が河口に堆積して閉塞し、俗に「水戸塞

政府は明治二年（一八六九）に白江村の河道を直線化し、明治四十四年に下牧・浮柳間の河道直線化を進めた。更に河道の拡幅、堤防のかさあげを続けてきた。
昭和五十三年（一九七八）九月に貯水容量六〇〇万立方メートルの赤瀬ダムが完成したが、一〇〇年に一度の大雨対策としては下流域の川幅拡張等の課題を残している。

小松砂丘を横切って日本海に注ぐ梯

梯川河口の様子



昭和9年(1934)7月12日、手取川の氾濫によって、能美線の線路を越えて板津村へ流れる濁流



昭和34年(1959)8月14日、台風7号の影響で浸水した茶屋町(『小松市制50周年記念誌』より) 100ミリを超える雨が降り、梯川の警戒水位を突破。小松一帯が多量なる水害を被った。

え」と称する流域農地の冠水害をもたらした。

昭和十二年（一九三七）、河口の北側に五〇メートル、南側に一〇〇メートルの導流堤が完成し一旦は防止できた。しかし平成十年（一九九八）九月台風七号で導流堤の一部が欠損するなど、その後も導流堤が波浪によって流され、補修工事が繰り返されている。

小松の北部では昭和初期まで手取川の氾濫による水害に襲われた。

昭和九年（一九三四）七月十二日、白山麓に降った豪雨と雪解け水は手取

梯川右岸に阻まれて三日目に及んだため、右岸堤防をダイナマイトで爆破してようやく排水することができた。

川流域を濁流と成り沿岸の村々を呑み込み、辰口町梅の木堤防を破壊して根上町の北陸鉄道能美線の線路を乗り越えて板津村、牧村に流れ込んだ。

泥水の滞留は

（犬丸博雄）

近代までの河口閉塞による水害

文政12年	1829	10月：浸水家屋473戸
嘉永2年	1849	10月：浸水家屋800戸
明治42年	1909	11月：2里四方が湖水化
明治43年	1910	8月
大正元年	1912	12月
大正2年	1913	11月
大正4年	1915	12月
大正6年	1917	1、12月
大正11年	1922	5、12月
大正13年	1924	1、2、12月
大正14年	1925	12月：4回
大正15年	1926	4回
昭和2年	1927	10月
昭和3年	1928	12月
昭和10年	1935	1、11月